

## 論文内容の要旨

論文提出者氏名 富永 敏行

### 論文題目

Relationship between alexithymia and coping strategies in patients with somatoform disorder

### 論文内容の要旨

身体症状を繰り返し訴えるが、医学的に説明のつかない疾患である身体表現性障害 (Somatoform Disorder ; SFD)がある。それにはアレキシサイミア (失感情言語症 ; 自己の感情を言語化することが困難となっている状態)がみられやすく、その程度を低減させることが SFD に対して有効となる可能性がある。それはこれまで非常に困難とされていたが、近年、変動するという報告もみられる。アレキシサイミアは不適切なコーピングをとることが指摘されており、適切なコーピング法を獲得できれば、その程度が軽減することで SFD の治療に繋がる可能性がある。本研究の目的は、SFD 患者において、アレキシサイミアの程度とコーピングの関連性を検討することである。

対象は、SFD と診断された 196 名 (女性 131 名、平均年齢 41.3 歳)である。心理社会的因子として SFD 症状のために受診した医療機関数、身体症状数、Zung Self-Rating Depression Scale (SDS)、Spielberger State-Trait Anxiety Inventory (STAI-trait, -state)、Somatosensory Amplification Scale (SSAS)を調査した。アレキシサイミアの評価には Toronto Alexithymia Scale 20 (TAS-20)日本語版を用いた。TAS-20 は合計点の他、感情同定の困難さ (DIF ; difficulty in identifying feelings)、感情表出の困難さ (DDF ; difficulty in describing feelings)、外向性志向 (EOT ; externally oriented thinking)の 3 つの下位項目を測定できる。コーピングストラテジーの評価は、Lazarus Type Stress Coping Inventory (SCI)日本語版を用いた。計画的問題解決型、対決型、社会支援模索型、責任受容型、自己コントロール型、逃避型、離隔型、肯定評価型の各項目別に得点化される。

TAS-20 合計点及びその下位項目と心理社会的因子及び SCI の関連性を解析するために Pearson の相関関係係数を用いた。次に、TAS-20 合計点及び下位項目を従属変数、それらと有意な相関関係が認められた因子を独立変数として Stepwise multiple regression analysis を施行し、TAS-20 および各下位項目に対して、独立して影響を与えている因子を調べた。統計解析は、SPSS 19.0 を用いて解析し、 $p < 0.05$  を統計学的有意とした。

TAS-20 合計点の平均値は 56.2 であった。TAS-20 合計点、DIF 及び DDF は、身体症状数、SDS、STAI-state、STAI-trait、SSAS と各々有意な相関関係を認めた。コーピングストラテジーに関しては、TAS-20 合計点、DDF 及び EOT は、計画的問題解決型、対決型、社会支援模索型、肯定評価型と各々有意な負の相関関係が認められた。DIF は逃避型と正の相関関係が認められた。Multiple regression analysis にて TAS-20 合計点は、STAI-trait、SSAS、社会支援模索型が他の因子と独立して関連していることが示された (adjusted  $R^2 = 0.43$ ,  $F = 49.3$ ,  $p < 0.001$ )。TAS-20 の下位項目の DIF モデルでは、STAI-trait、SSAS、逃避型 (adjusted  $R^2 = 0.36$ ,  $F = 37.2$ ,  $p < 0.001$ )、DDF モデルは Age、STAI-trait、社会支援模索型 (adjusted  $R^2 = 0.40$ ,  $F = 42.4$ ,  $p < 0.001$ )、EOT モデルは STAI-state、対決型 (adjusted  $R^2 = 0.14$ ,  $F = 17.3$ ,  $p < 0.001$ )が他の因子と独立して強く関連していた。

コーピングストラテジーに関して、DIF は逃避型が強く影響を受けていた。DIF の高い患者は、感情を区別することができないことから、ストレス状況下で不快で区別できない感情が生じると、その状況から逃避する傾向があることを示したと考えられ、DIF が高値の患者の治療では、感情面に焦点づけた介入、感情のラベル化、感情のセルフモニタリングを行うことが有効となる可能性がある。DDF は社会支援模索型と強い負の相関関係があった。DDF は感情を他者に表出する能力を測定しており、DDF が高い患者は、ストレスが加わっても他者に相談するなどの社会的援助を求めない傾向があることが示された。近年、アレキシサイミアの人は共感性が乏しく、相手の表情を読み取ることが困難で社会的機能が低いことが報告されており、本結果は、DDF 項目が社会機能に関連している可能性がある。DDF が高い患者では、感情の言語化を促す、他者に協力を求める対人スキルを向上させるなどの介入により、社会的な交流を促す治療が適していると考えられる。最後に、EOT は対決型と有意な負の相関にあった。EOT は、内面を洞察するよりも外的事象に関心が向く志向性を特徴とする。対決型は、現実的に問題の原因を直接模索し、解決しようとする対処であり、EOT 高値の患者の治療では、背景にストレスとなる問題の存在を検討し、その解決法を導く治療介入が適しているのかもしれない。

アレキシサイミアの程度は、不安抑うつ状態とは独立して、コーピングと関連していることが明らかとなった。SFD 患者の治療にあたっては、アレキシサイミアの特徴に応じてコーピングスキル向上を図る介入が有効となる可能性がある。